

「魔都の鼓動 上海現代アートシーンのダイナミズム」展 関連イベント

オープニング・パフォーマンス

「激烈劇場：上海諸島」

日時 2018年9月22日(土)11:00-12:00

場所 熊本市現代美術館 ギャラリーⅡ（激烈空間展示スペース）

出演 ヤオ・モンシー(姚夢溪)（激烈空間創設メンバー、インディペンデントキュレーター）

言語 中国語（日本語通訳あり）

通訳 ポン・ハイチー(彭海奇)

司会 佐々木玄太郎（熊本市現代美術館）



魔都の鼓動 上海現代アートシーンのダイナミズム

会期 2018年9月22日(土)-11月25日(日)

会場 熊本市現代美術館 ギャラリーⅠ・Ⅱ

【はじめに】

ヤオ これは空間についての一つの物語です。より正確に言えば一つの劇場です。激烈空間は作品を展示するための空間ではなく、芸術そのものについての空間として初めから構想されていて、私たちは芸術に対する思考と問いを一つの事件と見なしています。私たち実施者と参加者、そして皆さんのようなオーディエンスも、皆私たちのこの劇場の出演者なのです。

私の手元には 10 の小さな脚本がありますが、それらはいずれも私たちが行ってきたプロジェクトについて書かれたものです。これらのプロジェクトはいずれもいまだ生き生きとしたものです。というのは、これらは現在も継続しているからであり、プロジェクトによっては一生続いていくものもあるかもしれません。これらのプロジェクトや演劇は、私たちの寿命よりもさらに長いかもしれず、いつまでも続くかもしれないと思っています。

【空間の死 2014 年 5 月】

私たちのメンバーは当時 4 名で、その中でもシー・チン（石青）は比較的年齢が上で、当時すでに 20 年あまりの芸術活動の経験がありました。私は駆け出しの若手キュレーター。そのほかの二人は杭州の中国美術学院の学生で、シー・チンからも教わっていて、ちょうど卒業したばかりでした。

私たちは皆上海にいたので、上海で一つのスペースを開くことに決めました。最初の展覧会を行うとき、ある出来事があり、シー・チンは自分たちのかつての仕事について私たちに語り始めました。それは、中国にまだ現代芸術の機関がなく、アーティストが自分で展覧会を組織しなければならず、それを自己組織と呼んでいた頃の話でした。今、私たちもそのように仕事をしようとしていますが、しかし現在とかつてでは状況が大きく異なっており、今はすでに多くのアートスペースや美術館や機関があります。では今日において自己組織の活動をするにはどのような意味があるのか？ シー・チンは、それは自分にもわからないけれども、「何をすべきかはわからないが、何をすべきでないかはわかっている」と言いました。

私たちは社会への介入やコミュニティでの芸術など、多くのことを考えました。上海自体が中国の近代の歴史的イベントの発生地の一つであり、この歴史的な文脈や、自分たちの日常生活、自分たちが今日の芸術環境に不満を持っていることなどを考慮し、芸術を生み出すのではなく、芸術の状況を生み出すということを提起したのです。



決定 2014

実は私たちは一つの大きな現実的問題に直面していました。それは毎月の少なくない家賃や、また毎回の活動の経費のことでした。私たちは商業化していない芸術従事者だったので、この問題を解決する方法を考えねばならず、働くことでこの空間を維持していくことを考えました。

しかしこの空間に対する私たちの考え方の違いは思った以上に大きいものでした。一つの空間として、それは必ず死を迎えるときが来ます。シー・チンはブレヒトのとある脚本を見て、それを脚色しようと考えました。

現在の状況として、この空間はたしかに“死んだ”のです。この実際の空間はなくなりました。家賃が支払えなかったこともあります。より重要なのは、私たちがそのような空間を必要としなくなったことです。私たちの大部分のプロジェクトはいずれも現実の空間の中で発生しており、私たちは全国を駆け回ってプロジェクトを実施し、参加者と連絡を取っており、それらの場所こそが私たちの芸術事件の発生するところなのです。



集団主義建築 2014

続いてお話するのは、私たちの二つ目のプロジェクトについてです。中国は1949年以降、社会主義体制の国であり、集団生産およびそのような生産方式とセットになった集団主義生活を重視していました。そのような生活のための空間となっていたのが集団主義建築です。今日においてはそのような制度はすでに瓦解していますが、その建築や当時の生活習慣には今なお残っているものもあります。もちろん多くの空間はすでに改造され、様子は一変し、それらの工場の労働者は失業しています。

重慶は中国内地の大きな都市ですが、そこでアーティストのワン・ハイチュアン（王海川）は人々にコンパクトカメラを渡して撮影させ、展覧会を行いました。

チウ・ジャオダー（丘兆達）は上海の若い建築家で、彼の前の世代の女性には上海の紡績工場で働いていた者もいました。今ではその工場はすでに破産して、その女工たちも帰郷を余儀なくされました。しかし彼女らは長らくともに働き、深い親しみの情が生まれており、生活習慣も互いに近いものとなっていました。チウは女工センターの計画を立て、彼女らがかつての情のある生活を続けられるようにしました。

シー・チンのプロジェクトは秘密空間というものです。集団主義空間での生活は、入浴や調理といった比較的個人的で家庭的なことも含め、いずれも公共的なものとなっていました。しかし機会があれば、人々はやはり個人的な空間をつくりたいと思ったのでした。私たちは研究を行っている学者を招き、一緒に仕事をしてもらうこともしました。

■空間を行き来する 2015年

2015年に、シー・チンは広州の美術館で個展を行う機会を得ました。しかし彼はこの展覧会をより野心的なグループ展へと変貌させようとしていました。それが“内陸計画”です。私たちが知っているように、中国は広大で、それぞれの地域で地理条件も言語も異なり、非常に複雑です。内陸計画は空間を芸術の方法としようとするもので、移動を通して関係をつくり出そうとするものです。プロジェクトには“茶葉工場”、“英国館”、“十三行”などがありますが、ここではまず“通勤バス”計画について話したいと思います。

■通勤バス 2015年 5月-9月



内陸計画 | 通勤バス計画 2015

“通勤バス”計画は中国の7つの区域の都市で行った仕事です。野外での仕事や調査などを行いました。より重要なことは、移動の中で仕事の方法をつくり出そうとしたことです。これらの仕事より前には、ここまで大規模なことをしたアーティストはいなかったため、私たちにもなぞることのできる方法がなく、試しながらやってみるほかありませんでした。

幸いにしてこれらの都市の地理と環境はたいへん豊かだったので、私たちはいつも新鮮で生き生きとした経験をすることができました。

最初に向かった重慶では、工場区の移動食堂や、付近の農村で資本が投下されて土地破壊

が起こっているところを目にしました。農民は自分たちの権益を訴える方法を持っていなかった
ので、重慶の二人のアーティストは手分けして二つのプロジェクトに着手し、一人のアーティスト
は農民たちを引き連れてデモを行いました。

私たちは武漢では、現地の環境を守るアートプロジェクト“東湖計画”と交流しました。

東北の瀋陽では鉄西区を調査しました。その労働者と彼らが住む住宅地は新たな商業不
動産に取って代われ、多くの労働者が仕事を失い、路上でトランプや麻雀などの遊びにふけ
り、あるいはやけ酒を飲んでいました。私たちは労働公園で多くの労働者たちが集まってしゃべ
りながら、不満を吐露しているのを目にしましたが、後に他の都市でも同じような場所をみつ
けたのでした。私たちは今日において芸術はいったい何ができるのだろうと考えました。これら
の調査を通して一つわかったのは、芸術は空間に人々を集めることを通して、政治闘争を行う
ことができるということでした。北京、上海、広州、東莞といった他の都市にも向かいましたが、
岳陽のプロジェクトはその中でも唯一、村落に注目したものでした。

■ 茶葉工場 2015年5月

内陸計画の中でもう一つ重要なのは“茶葉工場”です。激烈空間の仲間は、シー・チンと
ともに福健の武夷山と、安徽の黄山付近の祁門県へと向かいました。この二つの場所は、い
ずれも中国で著名な紅茶の産地で、世界的に有名な三大紅茶産地のうちの二か所なのです。
なぜ紅茶の調査に行く必要があったのでしょうか？

それは、グローバル化した貿易に巻き込まれた近代中国の最大の製品が紅茶だったからです。
当時、中国人は紅茶を飲まず、紅茶はいずれも輸出用のものでした。また当時の茶葉の輸出
港は、展覧会の開催地である広州でした。茶葉の生産と貿易は、中国の内地の産地から輸出
港までの往来の発展を促しましたが、それらのつながりの最終的な決定権はイギリスと西洋に
ありました。最後には結局イギリスはインドで茶葉を栽培するようになり、中国から茶葉を輸入
しなくなりました。当時は日本からも西洋に茶葉を輸出していました。しかし中国の茶葉市場
は全く衰退することはありませんでした。なぜなら中国の人自身がお茶を飲み、内地の市場を
維持するに足る需要となっていたからです。



内陸計画 | 茶葉工場 2015

私たちはこのことから中国あるいは全アジアの現代芸術のことを連想しました。その最終的な価値はいつも西洋で決められ、彼らが良いと言ったものこそが本当に良いものとされるといふのは、本当に悲しむべきことです。二百年前の茶葉貿易と同様に、決定権は他人の所にあるということです。ですから、私たちが今回茶葉工場で働いたのは、茶葉のことを語るためだけでなく、自分たちの芸術生産の問題を語るためでもあるのです。実際、中国やアジア自身には自らの文化伝統と駆動力があり、茶葉の際と同様に、生産の源を私たち自身のもとに持っています。私たちは自らの芸術の価値体系をつくり出す必要があり、それができて初めて西洋と平等な対話と交流が可能になるのです。私たちはそれを“内循環”と呼んでいます。

■故郷 2015年3月

こういった思考のもと、私たちは実はより早い時期からこのような仕事を展開していました。同じ年の春節のころ、私たちはアーティストや芸術従事者に自分の故郷でリサーチをするように働きかけました。そしてそこでアーティストならではの方法を用いるように求めました。アーティストは比較的感性が豊かで、鋭敏でもあるので、新たなあるいは例外的な方法を取れるのではないかと考えたのです。中国人は春節には帰省して年を越す習慣があるので、私たちは30件余りの案を一気に集めることができました。それらの範囲は十数の省に渡り、またアメリカのフラッシングの中華街までもが含まれていました。

これらのリサーチはとても生き生きとしたものでした。ある者は現地の警察の友人に接触し、その友人たちは仕事と個人的趣味から写真を撮っていたので、彼らと一緒に写真展を開きたいと考えました。ある者は故郷の方言について、ある者は広場舞（訳注：広場等での集団ダンス）について研究し、また多くの者が自分の家族の歴史について研究し始めました。春節の後、私たちは会を開き、私たちにはいったいどのような差異があり、どのような異なる価値や方法があるのかについて、専門的な人類学の博士を交えて議論を行いました。私たちはこのプロジェクトを“地方仕事”と呼んでいます。

一緒に故郷に帰る 2016年3月



地方仕事 | 河南 2016

1年が経ってから、このプロジェクトはより深める必要があると感じ、私たちは“再訪”という方法を提案しました。つまりアーティストとともにその故郷に帰り、一緒に仕事をするのです。私たちは2016年には河南と浙江という2つの省に行きました。

河南省の鄭州では、いくつかの国有の綿糸紡績工場を訪れました。そのほとんどはすでに生産を停止し移転しており、ほとんどの退職した労働者は公園に集まって踊ったり、歌ったり、議論をしたりしていました。それはなかなかおもしろいもので、彼らは国の政治や経済政策についてそれぞれの意見を持っており、おのずと2つの派を形成していました。一方は毛沢東時代の政策を支持し、もう一方は鄧小平のやり方を支持しており、たびたび議論が発生していました。河南生まれのアーティストであり、激烈空間の立ち上げメンバーの一人でもあるホァン・ソンハオ（黄泓浩）は、これにもとづいて1つのプロジェクトを行いました。それは、毛沢東を支持

しているところではハイエクを語り、鄧小平を支持しているところでは左派の理論を語るというものでした。

その後、私たちは商丘にも向かいました。この場所は歴史的にも有名で、中国の商業の発祥の地でもあり、多くのおもしろいものを目にしました。そこはまさに中国の小さな都市の縮図でした。

浙江では紹興を訪れました。紹興は水の街であり、書聖の王羲之が暮らした場所でもありません。私たちは王羲之の著名な作品《蘭亭序》の蘭亭にも足を運びました。またここはもう一人有名な人物の故郷でもあります。魯迅です。魯迅は後に故郷を離れ、日本の仙台で医学を学び、後に文学に従事し、最後の10年は上海で過ごし、そこで亡くなりました。魯迅の晩年の思想の源の多くは日本語書籍を通して得られたものでした。彼の親友である内山完造さんが開いた内山書店は、魯迅が客に会う場所でもあり、本を買う場所でもありました。魯迅が住んでいた住居も内山さんがつけたもので、内山書店の職員という名義で入居していたのでした。

紹興は現在すでに他の都市と何も変わらないような形に改造されていますが、アーティストのダイ・チェンリエン（戴陳連）の家は水郷の中心的地域にありました。彼はそこでひどい恋愛経験をし、北京では苦しい芸術活動の経験をしていましたが、シー・チンの提案のもと、ダイは激烈空間で一つの演劇を行うことにしました。そのタイトルは《やはり放蕩息子でいよう。》というものでした。



地方仕事 | 浙江 2016

帰郷のもう一つの例は、アーティストのジャン・シアオチュアン（張小船）です。ジャンはよく日本に滞在していますが、彼女の故郷も日本で有名な二人の人物の出身地です。一人は王陽明で、もう一人は朱舜水です。中国のその年齢層の少女の多くと同様に、ジャンも家庭のしつけの下にあって、内心では反抗しながら表面的には従順でした。私たちはジャンの通った小中学校を訪れました。そしてジャンも激烈空間において、パフォーマンス的な形で故郷のダンスホールについて語りました。それもまた彼女の反抗の場所だったのです。

■ 映画現実 2016年10月

同じ年、激烈空間は上海ビエンナーレの“上海映画地理”というプロジェクトに参加しました。それは上海で撮影された過去の映画をリメイクするものでした。それは過去の映画と全く同じように真似て撮るのではなく、過去の映画の中で描かれている事柄を、今日の状況で再び語り直し問い直そうとするものでした。まず私たちは映画の撮影地を見つけ出さなければいけません。最初は10本を撮る計画でしたが、予算がとても少なかったことから、今のところその中の5本のみを撮った状況です。編集は論文を書くのと同様にとても苦しいものです。この展示会場でもリメイクした2本の映像を流していますが、翻訳は残念ながら作業量が多すぎて手が回らず、果たせませんでした。今回は皆さんに私たちの仕事の方法と内容をお伝えたいと思っています。美術館の予算は有限で、私たちも翻訳費を用意できませんでした。もしこれらの仕事や個々の映画に興味を持たれる方がいらっしゃれば、良い形を考えて交流を継続できればと思います。



「魔都の鼓動」展での激烈空間の展示風景 2018 熊本市現代美術館

ここで展示している2本の映画について簡単に紹介しておきたいと思います。1本目は「本日非番」です。描かれているのは、ある日曜日に1人の警官の身に発生した出来事です。その警官は絶えず他人を助け続けるのですが、私たちはそのうちの一つの話を取り上げました。それは自転車に乗ったとある人と衝突し、1日のうちに3度も偶然顔を合わせ、誤解から和解に至るというものでした。このストーリーは実在の人物をモデルにしており、1959年に撮影されました。ちょうど中国の大躍進政策の時代で、私たちが社会主義時期と呼んでいる中国特有の時代の一つです。現在50歳以上の人たち、つまり私たちの親世代は皆この時期を経験しています。現在の私たちはこの時期の歴史やその意味をどのようにとらえるのか、というのは芸術や文化の面からも特に注目に値するところです。この映画の撮影地は、中国の最初の新たな労働者の居住地である上海の曹楊新村です。私たちが撮影した際、現地の住民はかつての民警の制服を一目見て、「馬天民だ!馬天民だ!」と叫びました。それはこの映画の主人公の名前でした。この映画は当時大きな影響力を持ち、人々の警察への歴史的イメージを徹底的に変えたのでした。人々は彼らのことを“人民警察”と呼びましたが、現在では警察からこの呼び名は失われています。



上海映画地理 2016

もう一本は「大橋の下」という映画で、1984年といういわゆる“文革”が終わった時期に撮影されたものでした。“文革”の中国での評価は非常に複雑で、二極化してさえいます。この映画はその時代の若者や中国社会の転換の時期における未来への期待を描いていますが、そのような期待はもちろん国の運命ともつながっていました。その後の30年の間に中国に起こった巨大な変化を現在の時点から振り返るならば、恋に落ちていたかつての主人公の男女は、

現在ではどのような状況にあたるのでしょうか？ これらの歴史をどのようにとらえ省察するの
かについての取り組みも、激烈空間の中心的な仕事の方向性となりつつあります。私たちの今
後の仕事の多くは、これらの歴史と関連したものとなるでしょう。

【労働者の空間 2017年10月～現在

私たちは去年「工人文化宮」についての調査を始めました。これもかつての時代の産物で、
労働者たちの学習や娯楽のための場所です。今では取り壊されたり、他の用途に転用されたり
しています。

東北地方の重要な労働基地であった撫順という場所があり、そこには労働者が集まっていま
した。その工人文化宮は有名で、現在では入浴センターに改築されています。上海でも同様に、
曹楊新村付近の工人文化宮は早々に小商品の市場となり、2年前に取り壊しが始まり、最終
的には商業不動産プロジェクトの建設地となりました。このような状況は各地の工人文化宮で
起こっています。

私たちは現在これらに注目しているのですが、それは建物やその過去の歴史にのみ関心を寄
せているのではありません。現在の中国の社会では膨大な数の人々の集団が解散させられてい
ますが、それによってどのような状況が生じているのかを知りたいと思っているのです。今日の
労働者や多くの人々はどのようにして再度集まり、どのように新たな集団を構成しているのか
を知りたいのです。

【垂直の空間 2018年5月～現在

激烈空間のプロジェクトの数は、この2年ちょっと少なめです。というのは、最近の仕事の
重心をしばし一つの新たな街に移しているからです。その街とは重慶！ 重慶は中国の西南の
内陸地にあり、とても大きく、また非常に魅力的な都市です。有名な三峡もここにあり、また
工業基地も多くあります。映画のロケ地としても人気があり、ここを舞台にした映画は何百本
にもなるでしょう。

私たちが思うに、北京や上海のような超大都市は、すでに行き過ぎたほどに国際化されて
いる一方で、多くの問題は覆い隠されてしまっていますが、重慶のような内陸の都市はグロー
バル化の生み出す序列の中にはあるものの、それでもそこには生き生きとしたものが多くあり、
色々なものが混じり合った生活空間があり、心ある市民社会があります。そこで私たちは“重
慶地方仕事研究所”を設立し、しばらくの間の仕事の重心をここに置き、芸術的研究の方法を
用いて仕事を行い、アーティストによる執筆を行う準備をしました。ここでいう執筆というのは
文章や詩や小説を書くということではなく、私たち特有の言い方なのですが、つまりはアーティ
ストの一種の“編集”能力によって、観察し、知識による分析と自身の創作をともに有機的に

混ぜ合わせることを言っています。

激烈空間にとっては、自分たちの方法は常に変化し、前に進んでいるものです。私たちは一つの方法を精緻化していくことには満足せず、絶えず新しい仕事の方法を生み出しています。そのような空間は中国ではなかなかないのですが、私たちは未来の自分たちの仕事に大きな期待をしています。私たちには何か参照するものがあるわけではないので、自分たちが次にどんな仕事をするのか、その仕事がいっただいどのような驚きや喜びをもたらすのかはわかりません。

以上です。皆さんありがとうございました！

中文和訳・編集：佐々木玄太郎

※本記録は、激烈空間がパフォーマンスのために準備した中国語のスピーチ原稿を日本語訳した上で、一部編集を加えたものである。